

本報告書は、環境に関わる東北大学の多岐にわたる活動内容を体系的かつ網羅的に記述した優れた報告書である。データが適正に開示されて評価分析がなされており、事業所の報告義務を十分に果たしている。2012 年版は全体として見やすく仕上げられており、総論と各論のバランスもよく、2011 年版に対する本評価委員会の評価意見が十分に反映された結果、格段に読みやすいものとなった。震災の影響でデータの照会や収集に困難をきたすなかで本報告書をまとめられた環境報告書作成専門部会（2012 年度）のご努力に深く敬意を表す。今後、本報告書がさらに充実し、東北大学の環境マネジメントにさらに有効に活用されることを期待し、本委員会で出された主な意見を以下に列挙するので、参考にさせていただければ幸いである。

- 1) 各論 1 の「教育・研究活動における環境負荷の状況」における環境負荷データの推移の考察では、環境負荷の変化が震災の影響であると考えられる場合や、それにはまったく触れずに増減を説明する場合は混在している。震災の影響について一貫性のある考察が望まれる。表 I-3（「根拠」欄）やグラフでは、エネルギー使用量、二酸化炭素排出量等の前年度からの減少が震災の影響を受けていることをしっかり記述し、特別な方策により削減に至ったと考えられる場合には説明を加える等、環境目標の達成に向けた次の行動のために有効な記述とすることが望まれる。
- 2) 2012 年版では、一般読者になじみの薄いカタカナ語の使用に際して文中にその説明を付す等一般読者への配慮がなされたが、わかりやすさの確保の点でさらなる改善が望まれる。例えば総論 4 の「大学運営における環境パフォーマンス」の項では、「環境活動」と「環境パフォーマンス」が混在しその使い分けが明確ではなく、また図 I-1 の「ステークホルダーニーズ」という用語も一般読者がただちに理解できる言葉ではない。本報告書が学内外に広く発信されるものであるとの認識に立ち、専門家でなくとも理解できるような表現となるよう、さらなるご配慮をお願いしたい。
- 3) 表 I-3 の環境目標と環境活動計画は、4 年間の取り組み（2009～2012 年度）として設定されているので、今後は、環境目標とその達成度について、単年度の状況とともに 4 年間の環境目標に対する「到達度」を盛り込むことが望まれる。また「□□の推進」「△△の啓発」「景観の維持」という環境目標については、達成度や到達度をどのように評価するのかが明確ではないので、2013 年度以降の環境目標と環境活動計画では、目標の評価項目の具体化と数値目標の設定が望まれる。達成度の根拠については、具体的な説明が望まれる。
- 4) 教育・研究・環境コミュニケーションに関する活動を説明する各論 2～4 において、その具体例を記載する表や図の中に、一見して環境・安全が主目的とは言えない例が見受けられる（例：表 II-15、16、23、図 II-24）。リストに上げる事例を整理することが望まれるとともに、環境・安全との関連がただちにわかりにくい場合には、表の編成方法（テーマ別のカテゴリー等）に工夫を凝らす必要があると思われる。
- 5) 研究第一主義を旨とする総合大学の環境関連活動として、環境関連の法令遵守のみに留まらない、より広い視点からの記述のさらなる充実を期待したい。具体的には、新たな環境負荷となりうる先端科学技術に対するリスク評価やリスク管理及びそのような問題に対処できる人材育成プログラム等の取り組みについても、本報告書に盛り込まれることを検討されたい。